



宮崎県JICA派遣専門家連絡会

CONTENTS

国際協力とコロナの時代

乗 峰 潤 三

宮崎とのご縁と JICA の最近の動きについて

平 知 子

アフリカと宮崎で思ったこと

河 澄 恭 輔

ご挨拶

山 口 良 二



国際協力とコロナの時代

宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会会長

宮崎大学農学部

乗 峰 潤 三

会員の皆様におかれましてはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。山口良二先生から引き継いで、令和2年4月より宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会の会長に就任いたしました乗峰です。微力ですが、少しでも皆様のお役に立てるよう努力していきたいと思います。ご無沙汰しておりますが、いかがお過ごしでしょうか。コロナ感染拡大で、なるべく人のいるところへは行かず、行けばなるべく人との距離をおき、人が近くにいればなるべくしゃべらず、そんな日常が推奨される変な時代がやってきました。私も3月に散髪する予定が、床屋に行けない事態が続いていました。7月の協力隊活動報告会で席の一番前で帰国隊員の話をお聴いていたのですが、後ろにいた某SS元協力隊員は、髪が長い私を変なサーファーが座っていると思ったそうです。その節は、ご迷惑をおかけしました。9月の中頃にやっと断髪式を執り行い普通になっていますので、今後ともど

うぞよろしくお願い致します。

JICA 専門家で派遣されておられた先生方が、コロナの影響で現在宮崎に一時帰国されており、現地に帰れる目途がたたない状況が続き悔しい思いをされておられます。宮崎県青年海外協力隊を支援する会の日高会長の会報挨拶にも、帰国せざるをえなかった青年海外協力隊達が再赴任できない不安な日々を送っていることが書かれておりました。今年中に東南アジア4カ国については渡航再開が予定されていますが、今また感染が拡大しており楽観できない状況です。こういう時にこそ本会における連絡を強めて、国際協力で活躍中の片方を支援していくべきなのだと思います。とは言え、私たち自身もこれまでになかった不思議な、落ち着かない精神状態を経験しながら、自由に会えないもどかしさを感じていることも事実です。以前ネットワークと言えば、ネットで繋がっている仕事という意味ではなく、機

能性の高い手と手をつないだ密な関係という意味で使っていたと思うのですが、最近は遠隔で連絡を取り合う仕事のような間違った感覚が強くなっているようです。本連絡会は人が繋がって成り立つ会ですので、ウェブなどではない以前のような総会や3部合同総会が早く開催できるよう願っている次第です。

世界中で、新しい日常という考え方が広まっています。3密を避けながらグループ活動を正常に機能させる日常ということだと考えると、機能的に働くチームを作ることの重要性が再認識できるいい機会なのかもしれません。コロナの時代は、分断ではなく団結が人間社会の中に形成されていく時代であって欲しいですね。ソーシャルディスタンスはむしろ縮めて、安全なフィジカルディスタンスを保ちながらの心のこもった協力活動ができる時代がくるといいます。

様々な国と国の人と人、子供からお年寄りまで年齢が異なる人と人。人とのつながりの価値が今非常

に大きくなっている気がします。遠隔講義が続いて実感するのが、ネットでは人と人とのつながりはできていないということです。当たり前のことですが、国際協力が遠隔でできるはずありません。いつもできて当たり前のように思っていた定期的な総会や意見交換会もネットでやるようになってきました。「ネットでできる」ということになっているので、便利な時代だねと言われることもあり、寂しいですね。同じ場所に居てなんでもコンピューターの前でできてしまう、そんな訳ないですよ。

なんだか愚痴になってしまいましたが、会員の皆様が（対面式で）情報交換できる機会を作れたらいいと思います。大勢が集まるのが不可であれば、小さく分ければいいのかもかもしれません。いずれにしても工夫すればなんとかなるのではないのでしょうか。お叱りの言葉も出るかもしれませんが、様々なご意見、ご提案をお聞かせいただければと思います。よろしくお願い致します。



宮崎とのご縁と JICA の最近の動きについて

JICA 九州

市民参加協力課長 平 知子

宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会のみなさま、いつもお世話になっております。

九州センター市民参加協力課の平です。昨年8月に着任後、前任の江頭課長と引継ぎ出張で宮崎を訪問して以来、今年2月の副理事長参加の外国人材セミナー、10月の高千穂でのボランティアの派遣前特別訓練中間報告会への参加と、これまで3回出張致しまして、少しずつではありますが宮崎県の JICA 関係者のみなさまにご挨拶をさせて頂いているところです。どうぞよろしくお願い致します。

私は高校まで福岡にいましたので、人生最初の家族旅行以外の宮崎での思い出は、中学校の修学旅行での鶴戸神宮・青島の鬼の洗濯板訪問になります。海岸沿いに植わったヤシの並木を見て「南国だなあ」と思ったのを今でも覚えています。

その後は残念ながら宮崎とは疎遠になっていたのですが、5年ほど前に、直近の農村部(現 経済開発部)にて、宮崎大学農学部の方から地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) 案件のご相談を受けまして、家畜衛生分野の専門員と共

に面談をさせていただきました。

SATREPS (<https://www.jst.go.jp/global/>) でも特に「生物資源分野」は毎年 40 件前後の応募があるのですが、その中から 3 件程度しか採択されない大変な狭き門の事業となっています。私は農村部では、東南アジアの事業に加えて獣医・畜産分野の事業も担当していましたが、獣医・畜産分野の技プロは案件数が限られていたことから、同分野の事業を効果的に展開するために優良 SATREPS 提案については積極的に評価・推薦に取り組み、結果、2018 年度には、生物資源分野 2 件の新規獣医・畜産案件採択に至りました。

その 1 件が、宮崎大学の「世界の台所を目指すタイにおける家畜生産と食品安全に関する新技術導入による畜産革命の推進」プロジェクトになります。本案件は、宮崎大学が学術ネットワークを構築しているタイ側実施機関（タイ畜産局やチュラロンコン大学など）と協力し、口蹄疫を始めとする家畜における重要感染症の鑑別診断システムと流行予測モデルを使った感染症初動防疫システムおよび畜産製品の病原体汚染防止技術の開発を行うことで、タイ国における安定的かつ持続可能な家畜生産と安全な畜産製品を供給できる体制の構築に寄与することを目的として実施されます。新型コロナの感染拡大により、事業スケジュールに影響が出ていましたが、10 月下旬には長期専門家（業務調整員／家畜衛生）が



現地に派遣されてプロジェクト活動が開始されたところであり、今後の展開が注目されています。

なお、年代が遡りますが、宮崎大学と当センターは、2014 年 7 月に、5 年間の連携覚書を締結し、昨年度更新しています。この連携覚書は、両者が連携した開発途上国に対する国際協力事業や、大学や県内における国際理解教育の更なる推進を目的に締結されています。宮崎大学と JICA は、農業や保健医療分野での研修員受入や、草の根技術協力によるインドやミャンマーのヒ素汚染対策の協力、また昨今ではコロナ感染拡大で全員が帰国することとなった海外協力隊の待機隊員向け研修を実施頂く等の実績があることから、今後の更なる連携協力も期待されているところです。

今後の宮崎での JICA の取り組みについてですが、来年 1 月 20 日には、一昨年度から開始しました九州各県での SDGs セミナーの宮崎での開催（於 KITEN ビル）を予定しています。同セミナーでは、産・官・学・金・民・報の各関係者から SDGs の取り組みを紹介頂くと共に、関係者間の連携促進について意見交換を行う予定にしています。モデレーターには、ジェトロ・アジア経済研究所の佐藤寛先生にご出席頂く予定ですので、ご関心をお持ちの方は是非ご参加頂ければと思います。

最後にその他の動きとしまして、国内の外国人材の方々の生活環境整備や地域の多文化共生推進に向けて九州 7 県を担当します国際協力推進員が 11 月より着任し活動を開始しました。今後は各県で情報収集・意見交換を行いながら、JICA としての取り組みについて検討を進めていく予定にしていますところ、引き続き、宮崎のみなさまからのご支援・ご協力を頂きたく、どうぞよろしくお願い致します。

以上



アフリカと宮崎で思ったこと

宮崎大学国際連携センター

河 澄 恭 輔

2018年4月に宮崎大学国際連携センターに席をいただき、大学が取り組む国際協力事業の調整や運営、海外を志向する学生さんへの支援を担当させていただいています。それまでの10年間は、JICA職員としてケニアとウガンダで計7年、つくばで3年の勤務を経験いたしました。ODAを巡る環境とJICA事業の方向性が急速に変化するなかで右往左往することばかりでしたが、この10年を少しだけ振り返ってみたいと思います。

■悩める JICA - ODA と国益

「国益とはなにか」を、現場でより強く意識させられた10年でした。ODAの目的について、開発協力大綱（2015年閣議決定）では、「平和で安定し、繁栄した国際社会の構築に向けて世界が抱える課題の解決に取り組んでいくことが我が国の国益に不可欠」と記されています。これには誰も異論はないでしょうけれども、ただ、その「国益」が複層的な意味を持って現場に突き付けられてきた時代であったように思います。

少し遡りますが、JICAは2003年の独立行政法人化で、ODA事業を自立的に実施する機関として生まれかわりました。もう上級官庁から箸の上げ下ろしを言われることもなく、緒方貞子理事長を後ろ盾に「地球益」を追求する国際開発機関としての道を歩き始めたわけですが、その分、日本社会との関係には少々鈍感になりすぎていたかもしれません。JICAにとって日本の地域は人的・資金的リソースを提供してくれる存在で、国内の課題は無関係、と

いうのが当時の我々の見方であったように思います。その分あちこちで恨みも買っていたのでしょう、2009年の「事業仕分け」でJICAは袋叩きになりました。振り返ってもどこにも味方はいなくて、国内で理解者を増やすことの大事さをあらためて思い知らされた機会です。

その後、JICAは日本国内に向けた事業の拡大に大きく舵を切っています。日本の中小企業が持つ技術を途上国開発に役立てることを意図して、2012年に中小企業の海外ビジネス展開を支援する手厚い事業メニューが整備されたのも、日本社会や経済への貢献が強く意識されたものでしょうし、直近のJICAの中期計画（2017-2022）では、「地域の活性化への貢献」が重点領域として明記されています。

■ウガンダでは

2018年まで勤務したウガンダは、チャーチルが「アフリカの真珠」と称した美しい国です。1986年に政権の座に就いたムセベニ大統領が、比較的安定した長期政権を築いています。水資源に恵まれ、農業や電力の大きな開発ポテンシャルを有していますが、他の国々と同様、経済インフラの開発がウガンダ政府の最重要課題です。なかでも、ケニアのモンバサ港から内陸につながる道路・鉄道網（北部回廊）の整備がアフリカ東部の内陸国にとっては生命線で、JICAウガンダもこの課題に応じた事業に取り組んできました。流通のボトルネックの解消を目的とした「ナイル架橋建設事業」や、市内の渋滞緩和に向けた「カンパラ立体交差建設・道路改良事業」

などの大型の円借款事業が、それぞれ同国の最優先事業として実施されています。



■現場のジレンマ — 国策を巡って

国益との関係では、「質の高いインフラ」と称したインフラ輸出が、日本政府の重点施策のひとつです。コスト面だけで比較するのではなく、ライフサイクルコスト（長い目で見ると安い）、社会・環境配慮（人と環境にやさしい）、現地へのノウハウ移転（自立を支援）などに着目し、国民生活の向上につながるインフラ整備を支援していこうというものです。すなわち、現場レベルでは、「日本企業が優位性を持つ技術・ノウハウを用いた、確実に受注が見込める案件」の形成に注力することが求められますが、これがきわめて難しい課題でした。現実的に日本企業が明らかに優位性を持つ技術は限られますし、また、アフリカのリスク（政治、治安、コスト等々）を取ってまでアフリカに進出しようとする日本企業も限られています。加えて、国際ルールでの調達が原則の借款事業において、参加企業を限定するような仕様の組み込みを模索することは、ウガンダ国会や他ドナーからの厳しい視線にも曝されていました。もちろん他ドナーも、本音ではそれぞれ自国企業の受注を目指しているわけですが。

幸い、ウガンダは日本の技術に対する信頼がまだ厚いこともあり、上記の借款事業では日本企業の受注を確保することができましたが、アフリカ各国の現

場では、これからも ODA 関係者の苦悩と、厳しいせめぎ合いが続くことでしょう。

■難敵の中国

また、そこで直面したのは中国との関係です。日本以上にアフリカ諸国との長い協力関係を誇る中国は、インフラ分野でも圧倒的な存在感を示していました。その桁違いの資金力とスピード感は、経済開発を急ぐアフリカ各国が最も求めるものですし、安かろう悪かろうというイメージは既に過去のものとなっています。北部回廊開発の一環で、中国はモンバサから内陸国に至る鉄道の新設を支援しており、これは1兆円を超える巨大プロジェクトですが、猛烈な勢いで整備が進められています。

その中で、勝ち目のない中国との勝負をどう避けるのか、あるいは「協力」する可能性が模索できるのか、という課題にも迫られてきました。JICAの立体交差のプロジェクトでは、数年をかけて調査と設計を支援し、さあこれから入札をという段階で、中国からの横槍が入ってきました。鉄道の高架橋を通すので立体交差をもっと高くしろという要求です。コストにも機能にも大きく影響するわけですので、まずは調整をと呼びかけましたが全く対話に应ずる気配もなく、結局はウガンダ政府が追加コストを負担する形で押し切られてしまいました。中国との連携や調整の難しさは、これからますます現場での悩みの一つとなっていくことでしょう。

ただ、中国は日本のODAを深く研究している形跡も見られます。アフリカ支援の重点として貧困削減や環境保全を掲げた場面も目にしましたし、中国もおそらくは国際社会の中での新しい役割を模索しているのでしょう。あきらめず対話と呼びかけていくことが大切というのは、少々純真無垢に過ぎますでしょうか。

■宮崎で思ったこと

宮崎で2年半、「大学の地域貢献」をテーマに業務を担ってきました。その中であらためて感じたのは、光を放つ取り組みの中心には、必ず JICA 専門家を経験されたみなさんや JOCV 経験者の方々がおられるということです。JICA が地域に目を向けるよりもずっと前から、国際協力経験を経た方々が、それぞれの地域で地に足の着いた活動を継続しておられます。

詰まるところ、「国益の訴求」が意味するところは、「地域社会が変わっていく中で必要になることを、主体者の一人としてどう後押しできるのか」に尽きるのではと感じてきました。既に繰り返し紹介されている、バングラデシュ ICT 人材の地域への導入の試み「宮崎－バングラデシュ・モデル」は、日本政府が外国人材の活用促進に着手する以前から、宮

崎の差し迫ったニーズに応じて展開されてきたものです。

アフリカは、携帯電話の導入以降、通信の分野では日本を一気に飛び越えました。農家の生活も携帯電話で一変しています。こういった段階的な発展過程を跳び越えた進歩を、経済学の世界では「カエル跳び効果」と言うそうですね。新型コロナウイルス禍による国際社会の混乱はしばらく続きそうですが、その先には、新たな技術に伴われて、物理的な距離とか国境とか言語とか、あまり障壁とならない社会が待っているように思います。「取り残されていた宮崎」が一気に反攻に出る好機がそこまで来ています。

国益ってなに、という問いかけが、少しずつ現実感をもって腑に落ちてまいりました。

以 上



ご挨拶

前会長 山 口 良 二

昨年「令和」の新しい元号となり、新しい時代を迎えた矢先に新型コロナウイルス感染症が、世界中で広がり、もうすぐ1年立とうとしています。私ごとではありますが、大会長を仰せつかった日本獣医病理学会 JCVP が令和2年3月27、28日に宮崎市で開催が予定されて準備を進めていましたが、コロナウイルスの流行感染拡大防止のために中止となりました。大会長としては宮崎に貢献できる学会開催ができなかったことは大変残念に思います。また、アメリカの知人大学教授の招待講演も準備していましたので、開催中止は返す返すも残念でした。令和2年9月秋の山口大学主催日本獣医学会もリモート開催となり、学会の醍醐味ありませんでした。

この新型コロナウイルス感染症は、国際化、グローバル化社会の副産物であり、大きな劇薬となりました。もし国同士が行き来してなかったら、このようなことも起こらなかったと考えられます。新型コロナウイルス感染症は中国のコオモリが関与して出現した新興感染症と言われており、世界中に広がり、現在、欧米では桁違いの発生を見せております。病原性が高かったら、それなり治まって低かったらそれほど問題にならなかったものと考えられますが、感染力が強く、毒性もあり一方で無症状者もいるという感染症なので、その性状のためにやっかいで世界が十分に対処できない状態です。それ故、現在飛行機をはじめとする公共交通機関がストップしており、国際交

流もままならない状態です。私の科研費の仕事は海外の仕事がほとんどで、そのほかの共同研究も海外の仕事がおおく、また、現在、ポストドクの留学生も呼んでおりますがいまだに受け入れられる動きはありません。反対に経済の活性化のために go to キャンペーンは実施されているところです。感染の終息はないまでも、また、全く元に戻らないにしろ、いつになったら通常に近い活動ができるでしょうか。

日本では新菅総理が誕生し、アメリカではバイデン大統領に代わろうとしています。一方で、全く何年も変わっていないところもあります。日本やアメリカのリーダーが変わることで、新しい風がふくでしょうか。

これまで JICA 派遣専門家連絡会の会長を務めさせていただき、宮崎県 JICA 関連 3 団体の合同総会の実施を始め、各活動をさせていただきました。幹事の皆様ご苦勞様でした。海外に関係する活動は今後も続けさせていただこうと思っております。今年度退職ですが、そのような状況に置かれているとは思えず、未だに学生の論文校正をいくつもしています。いくつか科学雑誌に投稿もしている状況です。今後も宮崎から居住地をかえることは現在考えていません。今後ともよろしくお願いいたします。

ザンビアのザンビア大学、アルゼンチンのラプラタ大学、タイの（現）動物衛生研究所、ベトナムの中央獣医学獣医学研究所に専門家として派遣されました。当時気持ちも若く、エネルギーがあり、何ができるかについて試行錯誤でした。カウンターパートの経済状況もさることながら、今と何が違うかと言えば、私自身のエネルギーもかなり大きかった気がします。現地の人にはお世話になり、また、大学でないところは私の関連から大学へ休みに訪問させていただき、その流れで、ベトナムのベトナム国立農業大学から留学生が来るようになりました。タイでは、チュラロンコーン大学から短期留学生が来るようになり、こちらからも派遣いたしました。こちらからも訪問することや、お互いの大学の

MOU を作ったこともありました。それ以降ベトナムとタイは交流を続けているようです。そのほかに、マレーシアのプトラ大学のノーディン博士が、サバティカルリープで私のところを訪れ、マレーシアからは、優秀な学生が留学生として訪れ、1 人は日本の JCVP（病理診断専門医）の試験を日本語で受け合格し、さらに、日本の獣医師免許も取得し驚くべき変身をとげ、現在は診断会社に勤めております。もう 1 人はアメリカに飛び立つことを視野に入れ、在学しております。ACVP（アメリカ病理診断専門医）を目指しています。他にベトナムでは大学学長になり、タイではこれまで珍しいとされていたチュラロンコーン大学の教授に 2 人もなり、さらにタイの獣医師会長にも 1 人はなっています。ボゴール農業大学でも大変優秀な病理学者として活躍し、多くの留学生が巣立ちました。

JICA の活動も含めて、国際的な活動としては、育てて、さらに次を育てるという仕組みで、現在もそのつながりを利用して宮崎大学の中で、国際的に活躍しておられる先生もおられますが、私のこれまでのつながりが大いに役立っていると思います。タイのチュラロンコーン大学、インドネシアのボゴール農業大学、中国北京の中国農業大学、オーストラリアのメルボルン大学と先代の教授と一緒に MOU を締結し、また、新たに私個人を中心にそれぞれの国のトップであるベトナム国立農業大学、マレーシアのプトラ大学、ミャンマーのイエジン獣医大学と MOU を結びました。その間の宮崎大学のスタンスは大きく変わり、住吉、菅沼、池之上それぞれの学長および時代背景もあり国際交流に対する力の入れように特徴がありました。最初の頃は、学長を連れて行くと事務方からお叱りをうけました。農学部長を連れていくことはできました。また、農学部の事務員を連れて行くことは事務長も喜ばれていました。その頃は国際交流の連携室もなく、全学で 1-2 名の事務員だけが国際業務に携わっていました。

ましてや、国際関係の副学長などは存在していませんでした。その後、研究担当の副学長が兼任となり、最終的には国際部門が独立し副学長が誕生することになったのは、菅沼学長の時代です。その頃、それまで、全学の事務員を連れて行くことも渋られていた事務方も、ようやく事務員が海外に同行するようになりトップ外交ができるようになりました。

JICA 派遣専門家連絡会でも幹事になり、また、

縁があって、会長にもなりましたが、その役ではないとは思いつながら、周りに支えてもらいました。留学生や卒業した留学生、JICA 関係の皆様、私は多くの人にめぐまれて、活動することができました。国際社会の今後は新型コロナウイルス（Covid-19）がある程度落ち着き、以前と同じようには行きませんが、国際連携や協力は必要とされるでしょう。今後の皆様のご多幸と発展をお祈りいたします。



編集後記

JICA エキスパートより第 23 号をお届けさせていただきます。今回も前号に引き続き、JICA 九州国際センターより平課長に特別寄稿頂きました。乗嶺新会長、山口前会長よりそれぞれ執筆頂きました。また、宮崎大学国際連携センターの川澄先生に「アフリカと宮崎で思ったこと」と題して寄稿を頂きました。

コロナ渦によって、世界的にヒト・モノの移動が大きく制限される中で、国際交流・国際協力活動も例外ではありません。そのような中ではございますが、宮崎県 JICA 派遣専門家連絡会はオンラインなどの手段を駆使し、活動を継続していきたいと考えております。

本連絡会の活動について皆様のご提案、ご意見をお寄せください。御連絡は下記までお願い致します。

会長	乗峰潤三	nori@cc.miyazaki-u.ac.jp
幹事	大野和朗	ohnok@cc.miyazaki-u.ac.jp
	佐伯雄一	yt-saeki@cc.miyazaki-u.ac.jp
	福林良典	fukubayashi@cc.miyazaki-u.ac.jp
	井上果子	kako.inoue@cc.miyazaki-u.ac.jp
	河野 久	kawano.hisashi.x4@cc.miyazaki-u.ac.jp

事務局：〒 889-2192 宮崎市学園木花台西 1-1 宮崎大学農学部内

